

黒髪地区における学生と地域のゆるやかな つながりづくり

江村 和大¹・櫻井 理紗²・宮崎 絵理³・金城 幸作⁴・高山 未来⁵・瀬井 健人⁶

¹²³⁴⁵熊本大学 法学部法学科3、4年

⁶熊本中央区役所 区民部 中央区まちづくりセンター 主任主事 (アドバイザーとして参加)

熊本市では今春よりLINEを用いて情報発信を行い、地域のつながりを深めようとしている。地域のつながりを強くすることは、防犯や防災の強化につながるからである。しかし、学生は行政や地域に無関心であり、地域のつながりとは無縁である。また、地域の側も年に数度の活動への学生の参加を望むだけで、普段からの深いつながりを求めている。その結果、同じ町にいなながらも学生と地域は隔絶され、地域との連携が無い状況にある。そこで、我々は大学を介したコミュニティづくりを提案する。学生にとって身近な存在である大学を活用することで、地域と関わるきっかけになると考えた。学内にボランティアセンターを設置したり、地域志向の授業等で地域の方とワークショップを行うことで地域との交流に慣れてもらう。また、複数の部活が合同で地域の方も加わることでできるイベントを実施することで、地域とのつながりに加え、学生同士のつながりも生まれることが期待される。

1. 政策提言の背景

熊本市では平成30年3月26日より公式LINEアカウントを運営している。これは、熊本地震を経験し、必要なときに、必要としている人に必要な情報を届けること、さらには、日ごろから住民同士が、地域の中で、ゆるやかにつながりを深め、互いに支え合うこと、いわゆる地域力の強化こそが、防災力の強化につながるとの考えから、アクティブユーザーの多いLINEを活用してコミュニティの活性化を図る目的で開設されたものである。

我々は熊本市と連携して、開設から半年が経過した現在、新しい取り組みとして10月より「ドコクマ」を発信している。「ドコクマ」は、我々大学生が熊本市内の魅力的で「ここ、どこ!？」と気になるスポットを紹介するもので、学生目線で情報発信を行うことにより、同じ世代の学生や若者に、行政への関心をもってもらい、行政や地域の行うイベントに若者にも参加してもらうことを目的としている。

「ドコクマ」に取り組むにあたり、若者はそもそもどのような情報を欲しているのか、地域と学生とのつながりとは何か疑問に感じ、熊本大学の学生840人（学部生の約10人に1人に相当）に「学生と行政、地域のつながり」についてアンケートを実施した。熊本市LINE公式アカウントの存在を知っているのはわずか9%、友達登録に至

ってはずか2%しかしていないことが分かった。また、市のHPや市政だよりについても、その存在を知らない人が半数近くおり、情報そのものが若者に届いていない現状が浮き彫りとなった。

また、地域とのつながりを持ちたいと思う学生は49%と半数程度だが、地域と関わることは重要だと考えている学生は78%にのぼり、地域と深くつながりたくはないけれども、つながることは大切だと意識していることが分かった（図1）。

一方で、黒髪地区の町内自治会長4人に取材を行ったところ、地域の側はルールさえ守ってくれればそれでよいという姿勢であり、学生との関わり方についても、祭りや清掃活動といった年に数度行われるものへの参加や有事の際のマンパワーとして協力してくれればという認識であることが分かった。

これらのことから、学生と地域は普段からの密接したつながりではなく、何かあったときに支えあえるようなゆるやかなつながりを求めている（図2）と考えられる。けれども、現状では、学生が自治会に入る窓口も地域と関わる入り口もなく、またお互いに意見を交換する場も無いため、つながり自体がそもそも無い状態である。

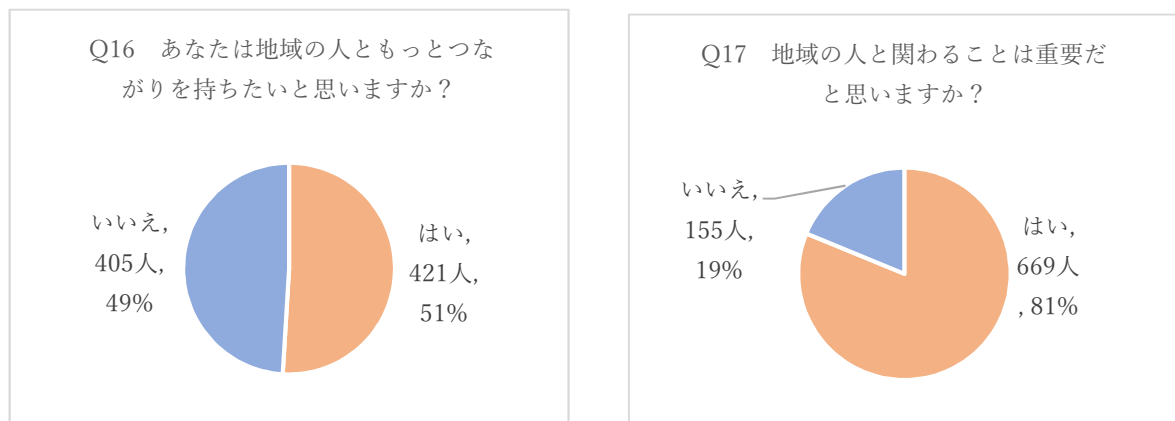


図-1 地域との関わり方について訊ねた2つの質問に対する回答

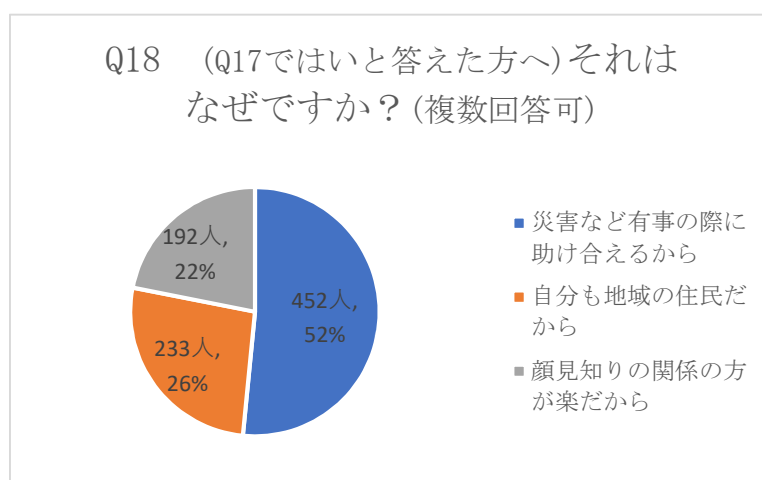


図-2 地域とのつながりが重要だと感じる理由を訊ねた質問への回答

2. 政策提言によって解決したい課題

(1) 学生が地域に対して無関心

まず、学生が地域に対して無関心であるために、地域とのつながりはほぼ断絶されているに等しい状況にある。このような状況では、地域の連帯感がないがゆえに悪徳業者に付け入るスキを与えてしまったり、不審者情報が多発したりと、安全・安心な生活を維持することが困難になることが推測される。また、学生が地域と関わる機会がないため、町内会で学生のために活動しようと思っても、学生の意見・要望が入ってこないために動きようがなく、学生向けの政策はとられない。そのため、同じ町に住んでいても学生と地域とで別個のコミュニティが形成され、学生は地域住民とともに住んでいるということあまり意識しなくなるのである。意識しなくなることで、ゴミ出しルールや自転車マナーを守らなくても意に介さないようになり、それが町の秩序・治安を乱すことが懸念される。一人暮らしをしている学生ほど、無関心である傾向にある（図3、図4）。

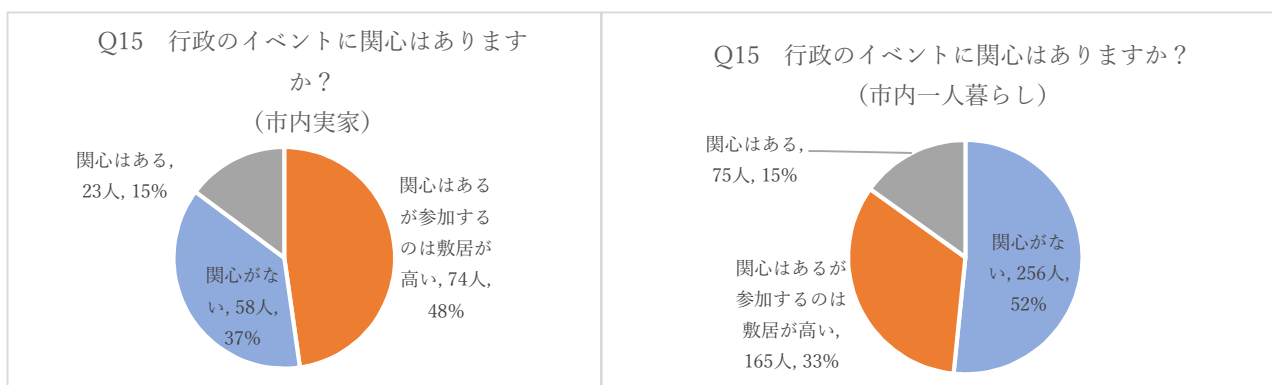


図-3 行政のイベントに関心のある人の割合(左：市内実家、右：市内一人暮らし)

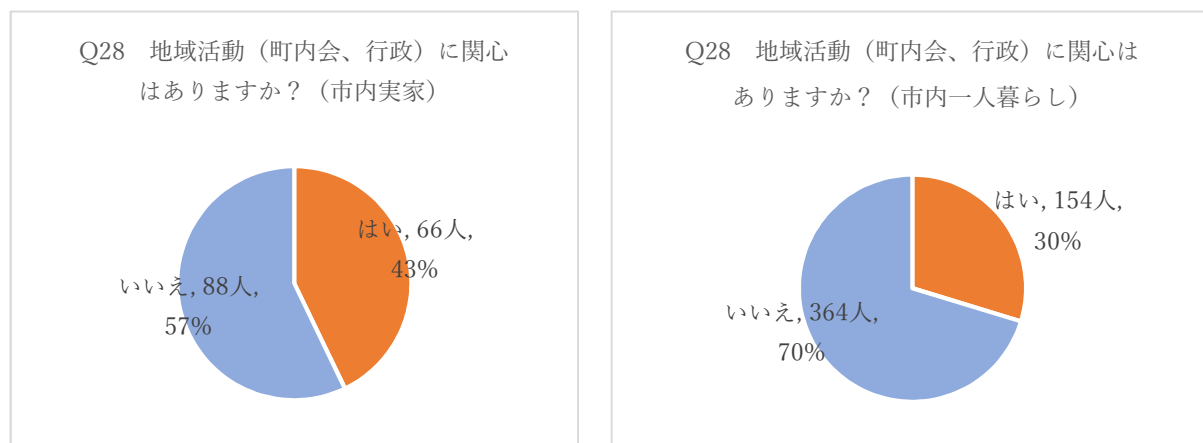


図-4 地域活動に関心のある人の割合(左：市内実家、右：市内一人暮らし)

(2) 学生が行政や地域の活動に参加する入り口が無い

次に、学生が行政に関心を持っていないため、行政がいくら頑張っても情報を流しても、情報が流れていることすら伝わっていない現状がある。情報が適切に伝達されていないと、行政側が学生に地域のイベントに参加してもらいたい、社会との関わりを学んでほしいと思っても、ごく限られた人数の学生しか参加しないことが容易に想像できる上、学生の側も、もっと地域のイベントに参加したいと思っても何があっているか分からないため参加の機会を逃すことになってしまう。

よって、上記2つの課題を解決するために、

「大学を介した地域コミュニティづくり」

を提案したい。情報が学生に届くためにはどうすればよいかというアンケートの問いに対する自由記述では、「大学を活用すべき」「大学と連携した取り組みをしてほしい」という意見が多かったこともあり、その効果は見込めるものと思われる。

3. 課題解決策の特徴、重要性、有効性

「大学を介した地域コミュニティづくり」では、具体的に、

- ①大学内にボランティアセンターを設立。
- ②地域と連携し地域課題を解決する人材を養成する事業であるCOCの授業と連携させて学生と地域の交流の場を設ける。
- ③サークルや部活単位で地域の方も参加できるイベントを開催し、地域と学生、学生同士のつながりをつくる。

という3点を実施する。

まず①により、ボランティアに参加したいと思っているが一步を踏み出せない学生を後押しすることが可能となる。現在、熊本大学内にはボランティアセンターのような組織は存在しておらず、学生がボランティアについて情報を知ることができるのは全学教育棟の掲示板くらいだ。また、学生が参加するボランティアといえば、花火大会やマラソンなどの目に見える分かりやすい活動に行く傾向にある。その他の選択肢を提供できる場を設けることで、ボランティアに関心のある学生にとっても選択の幅が広がり、行政や地域にとっても、人手が不足しているイベントに学生に参加してもらうきっかけをつくることができる。運営は、大学職員（学生生活課）及び先生方が主体となって行うものとし、呼びかけなどのサポートの役割をボランティアサークルの学生などに担うことを想定している。

次に、②は、地域志向の授業を行い地域課題を解決する人材を育成する取り組みであるCOCの授業内において地域住民の方にお越しいただき、大学周辺の諸課題についてワークショップを行うものである。いきなり学生に町内自治会に参加してと呼びかけたとしても、初めての場所に飛び込むのは非常に勇気がいることであるため、参加する学生は極めて少ないと思われる。ゆえに、まずは地域との関わりに慣れてもらい、ワークショップを通じて自分が住んでいる地域について思い返す場を設けることが必要になると考えた。COCの授業で地域と関わる場を設けることは、地域に根差した学生を育成することを目

標とするCOCにとってもそれを達成することになるし、地域に入るための入り口がないと感じている学生にとっても、それを解決することにつながるだろう。

③は、学生の立場から地域を巻き込んでイベントを企画し、ついでに地域の活動（清掃活動等）を行うものである。現在、体育会や文化部会という各サークルをまとめる組織が存在するが、これを活用し、サークルの垣根を超えてイベント(交流会)を実施する。例えば、将棋サークルと囲碁サークルが合同でイベントを行い、地域の方も学生と一緒に対局する。その後、一緒に清掃活動などを行うことを想定する。こうすることで、地域との交流が生まれ、また普段関わりのないサークルの学生同士でもつながりが生まれることが期待される。単に地域の清掃活動への参加を告知・要請したところで学生の参加が見込めないのは、学生には何もインセンティブが無いからであるが、地域活動は学生の企画イベントの一部で行うという形をとれば、参加しやすい環境に近づくと考える。

4. 結びに

黒髪地区では毎年学生の入れ替わりが起こっているが、学生以外の住民は高齢化が進んでおり、町内自治会活動の担い手の多くを高齢者が占める。黒髪地区を今後も安全・安心な町として維持していくためには、学生が地域に目を向け、地域とともに生きているという意識を持つことが重要になると思われる。1人暮らしの学生にとって、住んでいる地域の中で最も身近な存在である大学を活用することで、その意識に働きかけることが可能になるとと思われる。

参考文献

- 1) 熊本大学 COC HP
- 2) 熊本市 HP まちづくりセンターについて
(https://www.city.kumamoto.jp/hpKiji/pub/detail.aspx?c_id=5&id=15344&class_set_id=2&class_id=62) (平成30年10月28日閲覧)